

Raffiné Journal vol.22

核が響き合うとき

人と人が近づくととき、
二つのことが起こる。

どちらかが薄くなる関係と、
どちらも澄んでいく関係。

違いは、
優しさでも相性でもない。

中心の構造だ。

ある人と話していたとき、
言葉はきちんと交わされているのに、
どこかで噛み合っていない感覚が残った。

会話は成立している。
相手も穏やかで、違和感は表に出ない。

それでも、
触れているはずの何かが、
どこにも触れていないような感覚があった。

その場を離れたあと、
自分の輪郭だけが、わずかに曖昧になっている。

何かが起こったわけではない。

ただ、触れたはずの中心が、
どこにも残っていない。

人と人のあいだでは、
言葉や行為とは別の層で、
何か静かに起きている。

中心を持つ人は、
自分を守ろうとしているわけではない。

ただ、構造として
核が失われない。

外側が揺れても、
中心だけは静かに輪郭を保つ。

だからこそ、
その中心に触れない関係は
長く続かない。

人と人が近づくととき、
ときどき逆の現象が起こる。

触れるほど、
自分の輪郭がはっきりしていく関係。

舞台や画面の中で、
ごく稀にそれが起きている瞬間がある。

言葉を交わしていなくても、
視線が触れた一瞬で、
空気の密度だけが変わる。

何かを与えられたわけではない。
理解されたわけでもない。

それでも、
触れた場所だけが澄んでいく。

それは、
中心が中心のまま触れているときにだけ起きる。

核を持つ者同士は、
揃うことで成立しない。

一致する必要も、
重なる必要もない。

それぞれの中心が、
それぞれの位置にあるとき、

その「あいだ」に、
わずかな変化が生まれる。

何かが増えたわけではない。
何か混ぜたわけでもない。

それでも、
そこにしかない密度が立ち上がる。

あとから振り返ると、
それはひとつでも、ふたつでもなかった。

ただ、
第三の響きが、そこにあった。

人はよく、
二つを一つにしようとする。

けれど、
中心を持つ存在同士のあいだでは、
別のことが起きている。

溶けることも、
重なることもないまま、

それぞれの核が、
それぞれの位置に保たれる。

そのとき、
何も増えていないはずの空間に、
わずかな密度だけが立ち上がる。

それは関係ではない。
説明できるものでもない。



第三の響きは、
重ならないあいだにだけ、生まれる。



R.

Raffiné Journal vol.22
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné